



念仏総長と称された暁烏敏師

思う」と述べたという。その時は客観的に述べたに過ぎない。しかし、今その「宗務総長」という任を自分が背負うとしているのである。そこには相当な覚悟があったに違いない。

その夜、強硬に反対する奥さんと秘書に対し「聖人の七百回忌のこともわしが一番早く思い立ったし、聖人がお呼びになるのだろう」と独語されたという。

宗務総長就任の前年(昭和25年)11月28日『同帰』に、十年後に八十五歳という高齢になりそれどうにかして命を頂きたいと思うと前置きして、「もしおゆるしがあつて、七百回忌の御遠忌に遇うことが出来たら、私はどんな準備をせねばならないだろうか、又親鸞聖人の教化をうけてをる教徒はどんなことをしたらよいかということを考えています。その考えの一端を二十六年の元旦に発行する『同帰』誌上に発表したいと思うて、聖人御往生の御正忌の朝、この文を口授することとしたので

あります。」という。出して『宗祖の七百回忌を前にしての十年計画』を発表している。そこには「一切衆生の一人としての私は、親鸞聖人の教化によつて、常に平安と自由の生活を味はしめられてをります。あまりにも独断すぎるかもしれないが、一切衆生も聖人の教化によつて、平和と自由を得ることが出来ると思っています。私が親鸞聖人の教化によつて常に救済されつつある様に、一切衆生も亦救済されるにちがいないと信じてをります」と全人類の浄土往生を願ひ、「聖人の御教えを全世界に遍く伝えるのが聖人の御心をなぐさめることになり、何より報謝となることと信じます」とある。

この文が「宗門各位に告ぐ」(昭和26年3月)という「暁烏総長第一声」となり、同年7月、暁烏内局による「同朋生活運動」計画が発表され、昭和37年の訓勅総長「同朋会の形成促進」(第70回定期総長演説)となつていく。



組お待ち受けご案内
第七組
お待ち受け大会開催

日時 11月15日(日) 午後1時より午後4時 (12時間開場)

会場 まなみーる 大ホール (岩見沢市民会館)

講師 五木 寛之 氏

講題 「いま親鸞聖人に学ぶこと」

参加費 1,000円

*チケットのお求めは、第七組内寺院が教務所までお願いします。

御遠忌テーマ 「今、いのちがあなたを生きている」

教区御遠忌テーマ 「あなたは、与えられたいのちとどう向き合う？」

教化本部通信 【第48回】

真宗門徒の生活 朝夕におつとめをしましょう・声にだしてお念仏を申しましょう
を回復しよう すずんでお寺の法座に身を運びましょう・報恩講を大切にお迎えしましょう

真宗同朋会運動50年に向けて

その検証 興り(九)

念仏総長と称された暁烏敏師 (その3)

教化本部 古卿 誠幸

1951(昭和26)年1月26日夜、突然ともいえる宗務総長就任要請の電話があつたその2日後、「1月28日午後4時、

『只今全会一致感激の涙のうち先生推薦に決まった。必ず受けたと電たのむ』推薦者一同。

『60名満場一致あなたを宗務総長に推挙す。議長宛に返電せよ』宗議会議長。

『宗務総長をうけられたし』法主。(現在の門首)
『法主台下の御言葉もあり宗務総長をおうけありたし』内事局長。
『全員一致決した。必ず受

けたの電たのむ』一同。
『時局重大理屈抜きにして受けられたし』北陸全議員。
『総長受けたの電直ぐあれ』議長。

右次々と入電。

この間に、『盲目老骨任に堪えず謹みて御辞退いたします』と返電した(『同帰』昭和26年3月号「秘書手帳」野本永久)とある。

一度は辞退を決意しながらも、次々と入る受諾要請を廊下にある寒い電話口で受けながら、静かに念仏しておられた、という。しかし、その声はやがて「弱つたなー弱つたなー」という悲痛な声となつていった。その声を家人はその後ろに立つて聞いていたに違いない。

そして遂に「はい、お受けします。お受けします。お受けしたと電報を打てばよいのでしよう」と、受諾した。その電報は、宗議会を1日延期して待った29日午前零時15分に着いたという。

師は以前「宗務総長」について、その任の重きを「捨身業のように